デフォーと十六、十七世紀イギリスの決疑論

Defoe and Casuistry in 16th and 17th Century England

河　崎　良　二
Ryoji Kawasaki

The aim of this paper is to overturn the established theory on the relationship between Defoe and casuistry and propose a new idea to replace it.

序

本論で取り上げるデフォーと決疑論との関わりについては、既に一九七一年に G. A. Starr が著書 *Defoe and Casuistry*（以下『デフォーと決疑論』と記す）で論じており、それ以来彼の論が定説として受け入れられてきた。スターは「十七世紀の決疑論神学の全貌はまだ明らかにされていないが、決疑論から小説へという問題を考えるには、デフォーの倫理観、小説の主題、そして語りの技法への決疑論の貢献を考えることの方が重要である」と述べている[注1)]。しかしスターの論を検証してみると、前提となる議論が間違っていたり不十分であるために、決疑論から小説が誕生したとする過程が明確でない。拙論は小説誕生の過程を明らかにするために、スターが提示した問題を検討し直そうとするものである。結論を言えば、ローマ・カトリック以来の状況を重視する決疑論の伝統と、自分であらゆる道徳上の問題を考えぬかねばならないとしたイギリスのプロテスタントの考えが結びつき、イギリス独自の決疑論を発達させ、それが十六世紀末から十八世紀初めまでの文学に影響を与え、小説の誕生を準備した、ということである。では、先ずスターの論の検証から始めよう。

スターは『デフォーと決疑論』で、John Dunton が一六九一年から一六九七年まで出版した定期刊行誌 *The Athenian Gazette: or, Casuisticall Mercury*（しばらくして *Athenian Mercury* と改名。以下『アセニアン・マーキュリー』と記す）や、その後にデフォーが出版した定期刊行誌 *A Review of the Affairs of France*（以下『レヴュー』と記す）など十七世紀末から十八世紀初頭の新聞と言っていいそれらの定期刊行誌での身の上相談や *The Family Instructor*（以下『ファミリー・インストラクター』と記す）、*Religious Courtship*（以下『宗教的求愛』と記す）などの道徳書（コンダクト・ブック）を取り上げ、そこでどのように決疑論が適用され、どのような語

りの技法が使われたかを検討した。スターの主張はデフォーの小説の基本的な思想と方法が、デフォーが小説を書く以前に関わっていた定期刊行誌『アセニアン・マーキュリー』でよく使われた決疑論の影響によって形づくられたというものである。

『アセニアン・マーキュリー』には、読者から既存の道徳では律し切れない問題についての質問が数多く寄せられた。例えば、八年間音沙汰がない夫を捨てて別の男性と結婚しても良いかという女性の相談、あるいは、娘と知らず結婚してしまった男性、愛人を作った夫に働かされていたが、ある男性に面倒を見てやろうと言われた女性の相談など、デフォーの小説に出てきても不思議ではない問題が数多くあった。スターは、法律や、道徳では解決できない困った状況では、デフォーは、「人は主に自分自身の良心に頼らねばならないと信じていたように思える。しかし、彼はまた良心が怠惰と過ちに陥りやすいこと」(3) も知っていた、と述べている。後に述べるが、「自分自身の良心に頼る」ことがイギリスの決疑論の特徴である。しかし、過ちを犯しやすい良心が「状況が問題を変える」という決疑論の原則に基づいて一つの行為を選択するとき、それが完全な解決とならず、状況の変化が新たな問題を生み出していくことは容易に想像できる。デフォーの作品がどんどん続いて行く一つの原因は、たとえ決疑論を正しく適用し問題を解決したとしても、状況が変化するとまた新たな問題が起こるところにある。スターが、デフォーの作品の並列的構造に触れて、「デフォーの作品は、どんな大きなテーマの一貫性があろうとも、個々のエピソードは時間軸に沿って繋がっているだけで、因果関係がなく、持続した物語を形成することがない。決疑論がその原因の一つであるようだ」(x) と述べているのは、同じことを別の角度から論じたものである。

「並列的構造」と決疑論との関わりは明らかなのでわかり易いが、重要なのはむしろ、デフォーの時代には決疑論的な対処の仕方がパターン化するほど一般化していて、見えなくなっていたことである。漂着した島で地震にあったとき、クルーソーは様々な不安を抱くが、その描写も実は決疑論の影響を受けているのだ。それをスターは次のように述べている。

> こういう不安な思いに良心は全く関わっていないが、平衡を取り合っている状況を比較考察することが伝統的な良心の問題の形式に沿ってなされている。文章の構造が、慎重に進んでいるー難しい決定に向かって不安ながら手探りで進んでいるーという感じを伝えている。それは（排外的ではないが）決疑論の特徴である。“but”、“yet”、“nevertheless”、“still”、“however”、“on the other hand”、“on second thoughts” などの接続詞が頻繁に使われていることで、デフォーの主人公のありふれた窮地に劇的な緊張感を与えている。絶えず二者択一の均衡を保っていることはあらゆる種類のジレンマに重要性を与えているだけでなく、時には最終的になされた選択の実質さえ曖昧にしてしまうほど選択の過程に強調を置くことにもなっている（51）。

良心に関わる問題でない場合でも、デフォーの主人公は一つの行為を選択する前に迷い、躊躇する。一つの行為を行ったことではなく、その前に主人公が陥っていたジレンマや不安が記述され、それによって主人公が読者に強く印象づけられる。これが、デフォーが決疑論から発見した文体であり創作技法である、とスターは考えている。

「デフォーの男主人公、あるいは女主人公は何をし、どんな苦難をこうむろうとも、自分たちの行動を考察することに非常に多くの時間を使う。この過程を通して、私たちは十七世紀の主人公の誰よりも彼らについてずっと多くのことを知るようになり、また気にかけるようになるのだ」(ix)。スターはデフォーの小説の特徴を的確に捉えている。

しかし、デフォーの小説を連続したエピソードの繋がりと考え、『アセニアン・マーキュリー』の回答者としての経験がそれに影響を与えたとしながら、スターはそのことを『アセニアン・マーキュリー』と小説との比較によって具体的に検証していない。また、デフォーの小説のエピソードには因果関係がなく、持続した物語を形成することはないとしながら、では何がエピソードのつながりを小説に転化するのかについても触れていない。

語りの方法についてもスターは具体的な考察をしていない。例えばスターは一人称による語りについて言及しているが、それは単に投稿者が「私」という言葉を使用して質問しているにすぎない。「詳細に自分の危機を報告する一人称の質問者を使って、『アセニアン・マーキュリー』は登場人物、背景、行為を伝統的なマニュアルにおけるよりも生き生きと、複雑に創造している」(18-19) とスターは述べている。しかし、既に拙論で見たチェイフの論を思い出せば分かるように、どんなに質問者が詳細に自分の問題を説明しようと、それは現在の新聞や雑誌の人生相談の投書に見られるのと同様、現実の問題を説明する文であって小説の文章ではない[注2)]。

スターの論には『アセニアン・マーキュリー』などの定期刊行誌の「生き生きと、複雑に創造」された人生相談欄と小説とをつなぐ具体的、実証的な考察が欠けているのだ。その上、スターは、デフォーのコンダクト・ブックの内、*Robinson Crusoe*（以下『ロビンソン・クルーソー』と記す）の三年後に書かれた『宗教的求愛』(1722) を主に取り上げ、『ロビンソン・クルーソー』の一年前に書かれた『ファミリー・インストラクター』をほとんど無視するという過ちを犯している。そのために『レヴュー』と『ファミリー・インストラクター』第一部、第二部との関係や、それらと最初の小説『ロビンソン・クルーソー』との関わりについての考察が抜け落ちてしまったのだ。スターの論が出た一九七一年以後、文学と決疑論との関わりを論じた研究はいくつかあるが、スターが提起した小説の誕生と決疑論の問題を掘り下げる研究はまだなされていない。『ファミリー・インストラクター』に至っては未だに無視され続けている。

この論文では、デフォーの小説が決疑論的思考の影響のもとで誕生する過程を捉えるための前提となる問題を考えたい。それは、イギリスにおける決疑論の歴史と文学との関わりである。スターは十七世紀後半の『アセニアン・マーキュリー』以前の決疑論をほとんど問題にしていない。

そのために、カトリックの国々の決疑論と違うイギリス独自の決疑論の特徴がわからない。また、デフォー以前の決疑論と文学との関わりが無視されているために、デフォーが初めて決疑論を文学に応用したという印象を与える。しかし、文学と決疑論との関わりはデフォー以前に既に百年近い歴史があった。デフォーの時代の決疑論の特徴は、それが新聞の人生相談の欄で用いられるほど大衆化していたことである。デフォーはその俗化した方法を意識的に用いることによって、コンダクト・ブックを変質させ、小説という新しい文学形式を作り出したと考えられる。決疑論の影響によってデフォーの小説の基本的な思想と方法が形づくられたことを論じるには、先ず、以上のことを明らかにしておかねばならない。最初に、決疑論の考察から始めたい。

I

決疑論とは、OED の定義を借りて言えば、「一般的に認められた宗教や道徳の規則を、状況が違う事例や、義務に関して判断が難しい事例に適用し、良心に関わる問題を解決する道徳法則の一部である。」つまり、道徳の規則を個々の事例に当てはめて、問題を解決する方法である。

Camille Wells Slights はその著 *The Casuistical Tradition in Shakespeare, Donne, Herbert, and Milton*（以下、『決疑論の伝統』と記す）で、「イギリスの決疑論は十六世紀後半と十七世紀の現象であり、それは、その時期の宗教的、政治的経験に重要であった良心と権威の危機に対する反応として生まれた」[注3)] と述べている。つまりイギリスにおいては、決疑論は国教会を含むプロテスタントの信仰と密接に関わって誕生したのである。

もちろん、ローマ・カトリックが絶大な力を持っていた中世にも決疑論はあった。しかし、それはラテン語で書かれていて、主に告解における司祭に指針を与えることを目的としていた。中世およびルネサンスのローマ・カトリックの決疑論は平信徒のためのものではなかったのだ。イギリスの決疑論の特徴は、「究極的には誰もが自身の決疑論者であり、自分であらゆる道徳の疑問を考えぬかねばならない」（Slight, 35）ところにある。つまり、先の OED の一般的な定義をイギリスのプロテスタントの決疑論に即して言い換えれば、一般的に認められた宗教や道徳の規則を、個人の個々の事例や、自らの義務に関して判断が難しい個々の事例に適用し、自らの良心に関わる問題を自らが解決する道徳法の一部である、となる。この個人が自らの行為を判断するという考えが、一人の人間を主人公とする小説の誕生につながっていったと考えられる。だが、そのような意識が本当に十六世紀後半から十七世紀のイギリスに芽生えていたのだろうか。そして、それは本当に小説の誕生へつながっていったのだろうか。

スライツは、イギリスに決疑論的な考えが芽生えてきたのは、大陸の宗教改革の影響を受けてローマ・カトリックと決別し、国教会を樹立したヘンリー八世の次の時代、つまりエリザベス女王とジェイムズ一世の治世においてである、と言う（xvi）。この時代には、宗教改革によってカトリックの告解の秘跡が否定され、中世以来の伝統的な道徳体系も壊された。しかも改革派の

「ジュネーヴの教会規律が採用されなかったので、国教会は個人の良心を導く明確な綱領がないままであった」(4)。

ただし、「エリザベスの治世の国教会擁護者が直面していた第一の仕事はローマ・カトリックを批判することであった」(6)。大多数のイギリス人は国教会の信者であったが、当時、彼らは個人の良心を導く綱領を必要としていなかった。「彼らは明確な真実が聖書に見出されるとき、決疑論神学の込み入ったメソッドを完成させる必要があるとは思っていなかった」(7) のだ。このことは一六〇一年に出版された Arthur Dent の *The Plaine Mans Path-way to Heaven*（以下『庶民の天国への道』と記す）を見れば明らかである。無知な男が最後にキリスト教徒として歩む道を教えられるこの作品は、後にバニヤンに影響を与えるのだが、信仰に関わる疑問を聖書からの引用によって解決していく形を取っている。聖書が彼らの問題を解決する拠り所なのである。

個人の良心の問題に最も関心を寄せていたのは生涯国教会に留まっていたが、思想的にはピューリタンであった William Perkins とその弟子 William Ames である。神意は一人一人に向けられており、それゆえ「誰もが自分の魂の幸福に責任を持つ」[注4] というのが十七世紀のプロテスタントの考えであった。しかし、神と信者との縦の関係を重視する彼らの信仰には社会的な横の繋がりが欠けていた。パーキンズの決疑論の選集 *William Perkins 1558-1602: English Puritanist* の編者 Thomas F. Merrill は、「信仰のみという改革派の教義が道徳的相対主義と社会的混乱を招いたというのが、ローマ・カトリックが行ったよく知られた非難であった」[注5] と述べている。これに対してピューリタンは、「信仰と善行は同じコインの表裏である」(Merrill, xii) と応えた。しかし、この主張ではカトリックへの反論としては十分でなかったし、プロテスタントの実際的な要求を満たすこともできなかった。やはり、教義を補足する道徳体系が必要であった。

パーキンズと彼に従ったプロテスタントの決疑論者たちは、彼ら自身の実践的神学を創造するために、カトリックへの反感を克服して、中世以来の決疑論を研究した。同時代のイエズス会の方法は律法尊重主義であり、前例や規則を厳格に適用した。つまり、告白を聞く司祭は良心に関わる様々な事例に適応されてきた詳細な規則を適用したのである。パーキンズたちはこの方法を否定した。なぜなら、「法廷で裁くようなイエズス会のやり方は、良い生活のための必要条件を押し付けるだけで、人々に彼らの中にある最も良いものを努力して求めるように促すことにならず、良心の適切な発達を阻害すると感じた」(Merrill, xii) からである。彼らは「良心が人間性の動能的側面にあるとするフランシスコ派の考え」を採らず、「良心は道徳的感情や意志の動きではなく、実際的知性の行為である」(Merrill, xiii) とする聖トマス・アクィナスの教えを参照した。「良心は知的行為の中にしっかりと確立されていたので、その作用は三段論法の形で容易に表すことができる。言い換えれば、良心の判断は実践的三段論法と同じであった。この三段論法の主要な命題は良知良能 (synderesis) と呼ばれた。それは、それだけで道徳上の問題を比較することができる一般的な倫理基準を直観的に理解することであった」(Merrill, xiii)。しかも、改革派た

ちはカトリックが重視した伝統を否定していたので、彼らは権威として聖書を頼りにした。それで、パーキンズの言う実践的三段論法は、次のようになる。

Every murtherer is cursed, saith the minde:
Thou art a murtherer, saith conscience assisted by memorie:
Ergo, *Thou art cursed*, saith conscience, and so giveth her sentence.[注6)]

上の例の「全ての殺人者は呪われている」から推測できるように、主要な命題の土台となる第一原理は聖書に頼っていた。その点では伝統的である。しかし、上の例を見れば分かるように、刑を宣告しているのは司祭ではない。裁きを受ける人間の良心である。自らが自らの行為を裁いているのである。ここにカトリックの決疑論からの明確な決別がなされ、良心の問題は個々人が決定するという認識上の大きな転換が行われたのである。

パーキンズの著書 *The Whole Treatise of the Cases of Conscience*（以下『決疑論集』と記す）（1606）はイギリスにおいて決疑論を最初に体系的に扱った著作であり、後続のプロテスタントの決疑論のひな型となった（Merrill, xx）。小説の誕生に関わる問題に絞って言えば、パーキンズの思想の中で最も重要なのは、自らの良心が自らの行為を裁くという点である。これをスライツは、先に見たように、「究極的には誰もが自身の決疑論者であり、自分であらゆる道徳の疑問を考えぬかねばならない」と表現しているのである。またパーキンズの作品の編者 Ian Breward は、「パーキンズには信心に内蔵された個人主義があった」[注7)] と表現している。しかし、この革命的な考えは、「信仰のみという改革派の教義が道徳的相対主義と社会的混乱を招いた」というローマ・カトリックの非難を考慮してか、パーキンズの著作ではスライツが使ったような明確な言葉で表現されていない。

パーキンズの著作の中で具体的な行動の指針を与えているのは ,『決疑論集』の第三巻である。第一巻が個人としての良心を、第二巻が神との関わりにおける個人の良心を、第三巻が他者との関わりにおける個人の良心を扱っている。第三巻では、思慮分別を身につけるにはどうすればいいか、危害を受けたときにはどう行動すればいいかという問題から、富、食事、衣服、楽しみの取り方に至るまでが、質問とそれへの答として提示されている。例えば、キリスト教徒にとって気晴らしは合法的なものかという問に対して、労働からの休息は必要であり、またキリスト教徒として許されていることが説かれ、その根拠として旧約聖書の『伝道の書』の一節が引用されている（Merrill, 217）。つまり、『決疑論集』においては、個々の信者の判断の基礎となる一般的な指針が示されているのである。

パーキンズの後、弟子のエイムズの他に、Robert Sanderson、David Dickson, Jeremy Tailor、そして Richard Baxter が決疑論の著作を書いた。バクスターの *A Christian Directory: or a Summ*

of Practical Theology and Cases of Conscience（以下『キリスト教徒の規則書』と記す）（1673）の Jeannette Tawney による選書の序によれば、これはイギリスで書かれた組織的な決疑論の最後のものの一つである[注8)]。トーニーは、バクスターは経済活動に関しては産業革命以前の前近代的な、家父長的な考えを持っており、「商取引と宗教は違うという考えに反対し」[注9)]、倫理的な基準の必要性を説いた、と言う。バクスターの基本的な立場は、「利子は聖書によって、あるいは自然な理性によって禁じられている」（Tawney, xi）というものである。トーニーはまた、この七年後に John Bunyan が *Life and Death of Mr. Badman* を出版し、そこで貧しい者を食い物にして富を築くバッドマンを悪の典型として批判したことを指摘している（xi）。バクスターとバニヤンは経済活動について同じ考えを持っているのである。

バクスターの『キリスト教徒の規則書』は、経済活動以外の問題に関しても、前近代的で、家父長的な意識が強い。例えば、それは、次の召使への指示に現れている。「指示２．あなたの与えられた状態を神があなたのために選んだものと考え、自分を神の僕、自分の仕事を神の仕事と考え、人のためだけでなく、神に関することの全てを行いなさい。そして主な報酬は神から頂くと思いなさい」[注10)]。これでは、召使はいつまでも召使でいなければならないことになる。

バクスターの『キリスト教徒の規則書』は、第一巻が個人の義務、第二巻が家庭の義務、第三巻が教会の義務、第四巻が支配者と隣人の義務を扱っているが、非常に伝統的である。というのは、これらの義務については既にイギリスのコンダクト・ブックの初期のものと言える一六二二年出版の William Gouge 著 *Of Domesticall Duties* でも述べられているからである[注11)]。グージの書の第一章と第二章は聖書の中の家庭の義務に言及している章句の解説と、夫婦の相互の義務についての一般的な教えである。第三章から最後の第八章までは妻、夫、子供、両親、召使、主人の特別な義務を扱っている。特別の義務と書かれているので、個別の事例について書かれているように見えるが、実際にはそれぞれについての一般的な注意が述べられているに過ぎない。このことは既に述べた、一六〇一年に出版されたデントの『庶民の天国への道』も同様である。対話形式で書かれたこの作品の内容は、「人間の魂の内なる再生がなければ、この世の正直な人々は永遠に魂を失う危険があるのだ」[注12)] というように、一般的な教えから脱していない。バックスターの著書は十七世紀後半のものだが、ここでも一般的な義務について書かれていると言えよう。

バクスターが『キリスト教徒の規則書』を出版した「この1673年には、イギリスの主要な神学者が難しい道徳の問題を扱う方法を供給することに関心を向けた」（Slights, xv）のである。それが一六九三年から一七六〇年の間のコンダクトブックの流行に繋がっていく。「16世紀以降、徐々に識字率の高まりと書物の需要の増加によってコンダクトブックは人気を博し、従来の宗教性と道徳性に加え、料理法や医学療法に対する助言なども含まれて、1693年から1760年の間に500種類もの版が出ている」[注13)]。コンダクトブックは次第に宗教性と道徳性の希薄な、卑俗なものになっていったのである。つまり、十七世紀後半から、人々の関心が宗教から道徳へ、さらに日々の生

活へと移っていったのである。

ダントンが一六九一年から一六九七年まで出版した定期刊行誌『アセニアン・マーキュリー』が読者からの人生相談とそれへの回答を載せて好評だったのは、人々が日々の生活の中で直面する個人的な問題へのより具体的な指針を求めていたことを示している。それはまた、人々が自分の問題だけでなく、他人の問題にも関心を持っていたことを物語っている。

私たちはようやく、スターが著書『デフォーと決疑論』で取り上げたダントンの『アセニアン・マーキュリー』まで来た。スターは、デフォーがこの定期刊行誌の人生相談欄で、読者からの質問に答える仕事をするうちに、決疑論の方法を自家薬籠中のものにしたと考えている。しかし、ダントンや『アセニアン・マーキュリー』について調べてみると、スターの論には疑問な点が多いことが分かってくる。

ダントンは一七〇五年に自伝 *The Life and Errors of John Dunton* を出版している。そこで、『アセニアン・マーキュリー』の構想を得たときのこと、読者から質問がたくさん来たこと、途中から新しいメンバーで再出発したこと、模倣者が現れたことなどを書いている[注14)]。デフォーの名前はダントンが印刷屋として出版した本の著者の一人として出てくる。「ダニエル・デ　フォー氏は有能で、明敏な感覚の人物である。世間は彼が進取の気性に富んでおり、活発であることに満足している。しかし、もう少し慎重であったなら、小冊子 *The Shortest Way* をもう少し詳しく書いていただろうに」(239-40) 等々と書いている。デフォーの名前はまた『アセニアン・マーキュリー』が成功し、Charles Gildon が一六九二年に *The History of the Athenian Society* を書いたとき、その序文に付ける詩を書いた三人の才人の一人として記されている (258)。ところが、しばらくして『アセニアン・ガゼット』から『アセニアン・マーキュリー』に名前を変えたときに、九人のメンバーで読者からの質問に答えることにしたとあるが、個々の名前が書かれていないのでデフォーがそのメンバーであったかどうか分からないのである。二〇〇一年に出た研究書 Maximillian E. Novak の *Daniel Defoe; Master of Fictions* では、デフォーが実際にダントンと仕事をしたかどうかも、親友であったかどうかも分からないとしている[注15)]。それではデフォーは『アセニアン・マーキュリー』のような読者への質問に答える仕事をしていなかったかというと、そうではない。デフォーは一七〇四年から定期刊行誌『レヴュー』を出すが、そのなかに娯楽部門として読者からの質問へのアドバイスを載せた。ダントンはこれを『アセニアン・マーキュリー』の模倣だと言った。John Richetti はダントンの主張を支持しているが[注16)]、ノヴァックは、デフォーには多くのモデルがあり、むしろ当時人気があった Trajano Boccalini の *Advices from Parnassus* をモデルとしたのではないかと考えている (214)。いずれにしろ、そこには「ときには取るに足りない質問や道徳上の (そしてとりわけ結婚と恋愛の) ジレンマを相談する読者からとされる手紙」(Richetti, 87) が多数寄せられたのである。回答者はスキャンダラス・クラブとあるが[注17)]、実はデフォーが一人で回答していたのである。スターの言う通りデフォーは、決疑論的方法に通

じていたことは明らかである。では、決疑論的回答とはどのようなものなのか。先ず、スターが問題にしている『アセニアン・マーキュリー』を取り上げてみよう。

Gilbert D. McEwen は著書 *The Oracle of the Coffee House: John Dunton's Athenian Mercury* の第九章「金と結婚」で、「個人的な問題についてのアドバイスはずっと人気があった」[注18)]、「質問の大半は哲学的というより社会的である」(144)、「最も多かったのは結婚についてである」(148) と述べている。回答の特徴としては、状況が重視され、いくつかの選択肢が考えられていることが挙げられる。例えば、親方をだました徒弟に対して、回答者は状況に応じて二つの選択肢を与えている。もしも主人が良い人なら、できるだけ早く告白して、全額返済しなさい。もしも悪い人なら、返済するために密かにお金を貯めなさい。さらに回答者たちは、「更に問い合わせがあれば、必ず相談に乗ります」(143) と、新聞での回答が終わった後も、引き続きアドバイスをしようとしていた。

結婚にまつわる質問についても、『アセニアン・マーキュリー』の回答者たちは真面目に回答している。夫が、寡婦となった義理の妹を愛人にしようとして、自分の財産の全てを売ろうとしているという女性の悩みに対して、回答者たちは、妻の友人に調停を頼むように言い、もしもそれがうまく行かなかったなら、事実が間違いないという証明とともに二人の名前を知らせてくれれば、次の号のブラックリストに載せるとアドバイスしている (143)。デフォーの『レヴュー』にも出てくるが、結婚後にカトリックだと打ち明けた夫と離婚したいという女性の質問には、教会法の知識を使って、契約を守ろうとすれば罪を犯すことになるので、そのような契約は有効でないと答えて、牧師に相談するようにアドバイスしている (153)。また兄と妹の結婚という問題には教会法を参照して、「何者も神の法で禁じられ、一五五三年に発布されたリストに載っている範囲内では結婚してはならない」(153) としている。回答者たちのモラルの基準はただ一つで、「夫婦は互いの必要を認識し、それに応え、結婚を幸福なものにするための責任を分かち合う必要がある」(150-51) ということだ、とマキューインは述べている。三人の回答者は個人的な経験に基づいて、真面目な、時にはユーモアのある回答をしたのだ (149)。

確かに、パーキンズやバクスターのアドバイスと比べると、相談も回答も個人的な経験に基づいていることが分かる．では、それで小説に近づいたと言えるのだろうか。結婚を巡る親と娘との関係に Samuel Richardson の小説 *Clarissa* を思わせるところがあるとマキューインは述べているが (155)、実際的な人生相談の文章には虚構と結びつくところが少ない。では、後に小説を書くデフォーが出版した『レヴュー』はどうなのか。次に『レヴュー』を見てみよう．

Ⅱ

『レヴュー』とは、アン女王治世の一七〇四年二月十九日から一七一三年六月十一日までの約九年四ヶ月間、最初はパトロンであった Robert Harley のために、一七一〇年からはハーリーが

財務大臣として入閣したトーリー党内閣のために書かれた論評である。当時のイギリスはスペイン継承戦争、スコットランドとの合同という重要な政治問題を抱えていた。『レヴュー』の目的は、当時の重要な政治および社会問題をどのように考えるべきか、とりわけフランスの脅威、を大衆に教えることであった[注19)]。

最初は八頁で週一回の発行であったが、第七号は週二回、第八号からは週に三回の発行となった。それに第二号から読者を引きつけるための工夫として「スキャンダラス・クラブからのアドバイス」が付録として付けられた。このクラブはパリで創設された団体で、パリから楽しい情報とともにアドバイスを送るという形を取っていた。もちろんフィクションである。

『レヴュー』の部数や読者について言えば、部数は四百あるいは五百部ぐらいが印刷された。それらはコーヒーハウスで読まれたり、通りで『レヴュー』を持っている人の周りに人々が集まって、そこで読まれたと考えられている（Secord, xxii）。好色な問題まで扱ったが、デフォーの意図は不道徳を攻撃することであった。セコードは「『レヴュー』と付録は素朴な読者を啓蒙するのに重要な力があったに違いない」（xxi）と述べている。

スキャンダラス・クラブと付録の意図について、デフォーは一七〇四年九月の「付録１」の「序」で次のように述べている。「この団体を設立した意図は、恥知らずなこと、公の非難に値する事柄を調べ、咎めることであったが、疑いを晴らすとか、質問に答えるとか、論争を決着させるという、困難で、微妙で、満足のいかない仕事に、知らず知らずのうちに引きずり込まれてきた。これは最初の意図とは全くかけ離れたことである」[注20)]。

デフォーは、付録を書くのが嫌だと言っているが、この付録は月に五回、各回二十八頁にまで膨れ上がった（Secord, xviii）。決疑論や『ファミリー・インストラクター』との関わりで重要なのは付録の次の部分である。

「今、著者は決疑論者にならねばならない、そして未熟な哲学者から無責任な聖職者にならねばならない。祭壇に立つ全ての聖職者の許しを心からお願いする次第である。著者は一度『アセニアン・マーキュリー』と同様、文章の達人がいると嘘の主張をしようと思ったが、知ったかぶりをしたり、でしゃばったりするのは著者の不得手なことだし、書いているとすぐにわかってしまうので、素直に、できる範囲で答えるつもりである」（Vol. I . Supp. 3（Nov.）10a. 1704）。

この引用に見られるようにデフォーは、付録での読者の質問への回答が決疑論者の仕事、聖職者の仕事であることを心得ている。デフォーは、この仕事が好きでないと言いながら、よく考えて、真面目に答えている。書き方も、『レヴュー』第一号に、「できるかぎり真実に従いたい。そうすれば、全ての賢人が憧れるように、世の人々が物事を明らかに、はっきりと理解できるように導くことができるだろう」（Vol. 1.（Feb. 19）. 1704, 2）とあるように、明快に、平明に書いている。また同じ号に、「権威筋の前に呼び出されること、投獄されることを恐れない」（4）とあるが、それは一七〇二年に *The Shortest Way*（『非国教徒を撲滅する近道』）というパンフレット

を書いて、晒し台に立たされた苦い経験に屈しないぞ、という決意を感じさせる。『レヴュー』だけでなく、付録においても、デフォーは臆することなく、非常に明快に、言いたいことを言っているように思えるが、それは彼のこのような決意のためだろう。

ここでスターが述べていたフィクションとの関わりを念頭に置いて、具体的に付録の応答を取りあげてみよう。紙数の制限があるので、ここでは『ファミリー・インストラクター』との関わりを考えて、父親の権威と不服従な子供の問題に絞る。これは『ファミリー・インストラクター』第一部第三巻の長女を巡る話に非常によく似ている。一七〇四年十二月の『付録四』からである。回答部分を抄訳する。

この無分別な娘は、後一つの罪、老いた父親に暴力をふるい、ナイフで刺し、命を奪うという罪を犯せば完全な悪魔だ。アドバイスということだが、クラブはこの恐ろしい娘の行いに狼狽している。しかし、できるかぎり手助けしたい。

1．父親は．神の全能を模倣することだ。神の最大の罰が人間に好きなようにやらせることであるように、父親は娘に欲望の赴くままにやらせることによって罰を与えればよい。神が彼女に後悔と恵みを与えるまで、娘を追放すること。

2．夫は紳士として、キリスト教徒として、父親の親戚として行動したように思えるが、夫には妻に対して次の義務がある。

（1）法で決める前に愛情で解決すべきであり、妻に対して、謙虚な態度で両親への義務を行うよう命令しなさい。

（2）夫は紳士らしい振る舞いを示し、彼女に恥をかかせて、妻の人道にもとる行為を止めさせるようにすべきだ。

3．夫婦の間での暴力はどんな場合でも勧められない。夫は女性が暴力によって矯正できると信じてはいけない。それは夫に約束された方法ではないので、神の祝福を得られないだろう。

妻には先ず悔い改めて、傷ついた父に謙虚に対し、娘としての義務に戻り、妻とキリスト教徒、淑女、そして親戚としての役割を果たすように勧めること（Facsimile Book 3 of Vol. I . Supp. 4. (Dec.) 18)。

キリスト教徒としての、娘としての義務を忘れてしまえば、元来堕落している人間は恐ろしい獣性へ堕ちていくのだとするデフォーの人間観がよく表れている。また、暴力を使わないで愛情によって妻を導くようにという夫へのアドバイスは、『ファミリー・インストラクター』第一部第三巻でも繰り返し述べられている。

ここで、『レヴュー』と先に挙げた『アセニアン・マーキュリー』の違いを考えてみよう。最も大きな違いは『レヴュー』の付録が二十八頁にまで膨れ上がっていることが示しているように、

回答が詳しくて長いことである。デフォーが質問への回答にのめり込んで、種々の状況を考え、状況ごとに質問へのアドバイスを考えているためである。デフォーはまさに「状況が問題を変える」という決疑論に基づいた思考をしており、しかもそれにのめりこんでいるのだ。それはデフォーのフィクションの場合と同じである。スターが指摘していたように、デフォーは小説においても状況を変化させ、そこに現れる問題を考えることでエピソードを作っていた。また“but”、“however”などの接続詞を用いて一つの問題への種々の対応を考えていた。では、スターが証明しないまま当然のこととして扱っているように、『レヴュー』での方法が虚構作品を生み出したと考えていいのだろうか。

『レヴュー』の回答者「私たち」は虚構であるが、『レヴュー』の目的は現実の質問に答えることである。どんなに様々な場面を想定して答えたとしても、それは虚構の話を作ることを目的としたものではない。つまり、スターの論はデフォーの小説技法については核心を突いているが、小説誕生の過程を解明していないのである。コンダクト・ブックにおいて、いくら様々な場面を想定して答えたとしても、現実の問題を解決しようとする限り、虚と実の壁を越えることはできないのだ。

では、決疑論について考えることは小説の誕生を考える上で不必要なことだったのか。そうではない。デフォーが『レヴュー』で「私たち」という仮面をかぶり続けたように、決疑論は現実と仮面一枚でも離れている方が活発に働く性質を持っているのだ。そのことを問題にしなかったためにスターは、具体的な場面を想像して考える決疑論の方法が虚構を生み出していると誤解したのだ。しかし決疑論に虚構を生み出す力はない。虚構を生み出すのは語りである。作者から独立した語り手が存在し、その語り手が物語るとき、そこに虚構が生まれる。決疑論が、現実より虚構においてより自由に飛翔したと指摘したのは、既に述べたスライツである。スライツによれば、決疑論の影響はデフォーより百年も前から文学に現われていたという。

スライツは著書『決疑論の伝統』で、「シェイクスピア、ダン、ハーバート、そしてミルトンは全て決疑論的手続きに関心を持ち、決疑論の領域である良心の問題に想像豊かな形を与えている」(xvi) と言う。ここではその代表的な例としてシェイクスピアの場合を見ることにしよう。スライツは、決疑論者の良心についての分析と道徳問題を解決する方法が *Richard III, Julius Caesar, Hamlet, Macbeth* における意思決定の過程とその結果の記述に明らかに表れていると思うと述べている (xvi)。ここでは『ハムレット』について見る。

父王の死への疑いからハムレットはこの世が迷いと疑いの世界であることを知る。そこでは、登場人物は自らの意図を隠しながら、相手の意図を探ろうとする。「この蔓延した、知識が欠けているという意識と、混乱と欺瞞を増す試みとが選択を難しくしているが、何をなすべきかを決定する必要性は残っている。『ハムレット』では、決疑論でのように、人々は疑いに応えてどのように行動するかによって、道徳的性質を明らかにするのだ」(92-93)。

例えば、Ophelia は、「私には何を考えるべきなのかが分からないのです」と告白する。それにもかかわらず、彼女は父親の判断を疑いもせず受け入れる。Gertrude も何の疑いもなく伝統と習慣に依存している（93-94）。Polonius もオフィーリア同様、ハムレットの状況を理解していない。それで十分な証拠もなく、血のたぎる若さと報われない愛という一般論を当てはめる（94）。

「このようにして、『ハムレット』では、主要な登場人物たちが、『ジュリアス・シーザー』の登場人物のように、世界の混乱に貢献し、事実誤認と道徳的過ちを通して自らを破壊していく。Laertes は復讐に自らを捧げるとき、良心を否認する」（95）。「理性的、道徳的判断を捨ててしまうのだ」（96）。

「ハムレットの問題は血まみれの復讐者となる誘惑、あるいは決然と行動できない性格的無能にあるのではなく、一連の、ある特定の状況の中で何をなすべきかを決定することなのだ」（98-99）。

パーキンズがケンブリッジで決疑論について講演し、また人間の道徳的義務について論争していた十六世紀末は、シェイクスピアが四大悲劇を書き始める少し前である。そのことを考えると、決疑論の影響が、『ジュリアス・シーザー』や『ハムレット』などの悲劇に現れているというスライツの主張は十分説得力を持っている。「究極的には誰もが自身の決疑論者であり、自分であらゆる道徳の疑問を考えぬかねばならない」としたイギリスのプロテスタントの考えはシェイクスピアの劇という虚構の中で最も生き生きとした姿を現していたのである。

イギリス独自の決疑論の影響はミルトンについても明らかである。ミルトンは *Areopagitica*（1644）における政治や宗教論争から *Paradise Lost*（1667）、*Samson Agonistes*（1671）における誘惑に至るまで、一貫して神から与えられた理性による選択の問題を追及してきた。言論の自由や離婚問題などの現実的判断においても、叙事詩におけるサタンの誘惑やアダムとイヴの堕落という神学的問題においても、良心を惑わす問題において、確かに「ミルトンの書くほとんど全てに決疑論的枠組みが浸透している」（Slights, 247）と言うことができる。「究極的には誰もが自身の決疑論者であり、自分であらゆる道徳の疑問を考えぬかねばならない」というイギリスの決疑論に関する基本的な考えは、十六世紀末から十七世紀後半の文学に深く浸透していたのだ。

十六，十七世紀にシェイクスピアやミルトンが依拠した決疑論的枠組みは、十七世紀後半から十八世紀初めには新聞の人生相談欄に受け継がれていた。またこの時期には、既に見たように決疑論を基にした道徳書が人々の間で流行していた。一七〇四年二月から一七一三年六月までの九年四ヶ月にわたって決疑論的枠組みに依拠して『レヴュー』において様々な問題に回答してきたデフォーは、人生において起こりうる多くの問題に通じることになった。その二年後の一七一五年に彼は『ファミリー・インストラクター』第一部を書き、一七一八年に第二部、そして一七一九年に小説『ロビンソン・クルーソー』を書く。『レヴュー』において、人生における様々な問

題に回答してきたデフォーは、『ファミリー・インストラクター』においては、逆に、読者の参考となるように、不服従な息子や娘、あるいは感情的になりやすい父親などの具体的な話を語るのである。語り手は作者自身と思われるが、作者とは別の、話の中の登場人物たちが自らの過去を語る場面も出てくる。つまり、決疑論が自由に羽ばたく虚構の空間がそこに生まれるのである。いよいよ私たちはイギリス小説が誕生する瞬間に達したようである。

注

1）Starr, G. A. *Defoe and Casuistry.* New Jersey: Princeton UP, 1971. 8-9.

2）拙論「語りから見たイギリス小説の起源」『英国小説研究』第21冊（英潮社、2003）、54-90を参照。

3）Slights, Camille Wells. *The Casuistical Tradition in Shakespeare, Donne, Herbert, and Milton*. New Jersey: Princeton UP, 1981. 4.

4）Starr, G. A. *Defoe and Spiritual Autobiography.* 1965. New York: Gordian Press, 1971. 5.

5）Merrill, Thomas F. Introduction. *William Perkins 1558-1602: English Puritanist*. Ed. Merrill. Nieuwkoop. Neth.: B. De Graaf, 1966. xi.

6）Perkins, William. "A Discourse of Conscience." 1608. *William Perkins 1558-1602: English Puritanist.* Ed. Thomas F. Merrill. 38.

7）Breward, Ian, Introduction. *The Work of William Perkins*. Ed. Breward. Berkshire: The Sutton Courtenay Press, 1970. 33.

8）Gore, Charles. Preface. *Chapters from A Christian Directory: or A Summ of Practical Theology and Cases of Conscience.* By Richard Baxter. Ed. Jeannette Tawney. London: G. Bell & Sons Ltd., 1925. viii.

9）Tawney, Jeannette. Introduction. *Chapters from A Christian Directory.* By Baxter. Ed. Tawney. xiii.

10）Baxter, Richard. "A Christian Directory: or A Summ of Practical Theology and Cases of Conscience." 1673. Ed. Tawney. 15.

11）Gouge, William. *Of Domesticall Duties*. 1622. The English Experience. Its Record in Early Printed Books Published in Facsimile. No. 803. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, Ltd., Norwood N. J.: Walter J. Johnson, Inc., 1976.

12）Dent, Arthur. *The Plaine Mans Path-way to Heaven.* 1601. The English Experience. Its Record in Early Printed Books Published in Facsimile. No. 652. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, Ltd., Norwood N. J.: Walter J. Johnson, Inc., 1974. 20.

13）五幣久恵、網谷克彦、「コンダクトブックに見る『女性教育』とジェンダー」、『敦賀論叢』第16号（敦賀短期大学、2001）、20.

14）Dunton, John. *The Life and Errors of John Dunton*. 1705. The English Book Trade, 1660-1853. New York: Garland Publishing, Inc., 1974. 248-264.

15）Novak, Maximillian E. *Daniel Defoe: Master of Fictions.* New York: Oxford UP, 2001. 110.

16）Richetti, John. *The Life of Daniel Defoe.* Malden. MA: Blackwell Publishing, 2005, 87.

17）第二号では“*Mercure Scandale:* Or, Advice from the Scandalous Club. Translated out of French”であったが、第十八号（一七〇四年五月六日）から“Advice from the Scandalous Club”と変えられた。

18）McEwen, Gilbert D. *The Oracle of the Coffee House: John Dunton's Athenian Mercury.* San Marino: The Huntington Library, 1972. 141.

19）Secord, Arthur Wellesley. Introduction. *Defoe's Review.* 22 vols. By Daniel Defoe. Ed. Secord. New York:

Columbia UP, 1938. xvi-xviii.

20）Defoe, Daniel. *A Supplementary Journal, to the Advice from the Scandalous Club* 1（Sept. 1704）. Facsimile Book 3 of Vol. 1. Ed. A. W. Secord. 3.